

垂水史談会報

第 50 号
2023 (令和 5) 年
4 月発行

【報告】

国指定垂水島津家墓所の災害復旧

検討委員会始まる

垂水家の墓所(島津墓地)は、島津家本家をはじめ、加治木家、重富家、今和泉家、宮之城家とともに、令和二(二〇二〇)年三月十日に国指定の文化財となりました。ところが同年七月六日の大雨で裏の城山が崩れ、北側の墓石等が土砂に埋まってしまいました。



その後、急傾斜地の復旧工事が完了したのを受けて、大福コンサルタント(株)など専門業者等により、発掘作業が進められて来ました。



三月十六日、文化会館において、墓所の災害復旧検討委員会が開催されました。委員長は鹿児島大学法文学部の渡辺芳郎教授(考古学)、委員は同大学名誉教授の北村良介氏(土木工学)、大木公彦氏



(地質学)、そして文化財保護審議会からは川崎あさ子、瀬角龍平の計五名です。オブザーバーは筑波大学芸術系教授の松井敏也氏(保存科学)。

当日は文化会館から島津墓所の現地視察・説明、そして文化会館の敷地内に仮置きしてある墓石等の現状説明を受けました。



今後、検討委員会は被災した九基の墓石等石材の修復方法等について協議を行います。七月、九月、来年二月または三月の三回の開催が予定されています。

【垂水市史料集(一)】より

西南之役 私学校生徒の従軍譚 ⑥

—立山健氏への聞き書き— (山口栄之 筆記)

東の方へ向かって進む 小濱加治木隊長

どんな形勢であるのか、又どういふ画策があるのか、そんなことは我々には判らなかつた。知ろうとも思わなかつた。そしてただ命令通り神妙に動くのであつた。

今までは小倉鎮台を攻めて北へ北へと進んだものを、これから東へ東へと豊後方面に向かつて進むようになったのである。二月中旬ごろ、鳥の巢という所に行つて暫く滞陣した。この戦いにわが垂水の高野市之進が戦死した。

この時分のことである。加治木の小濱某という人が加治木隊という別動隊を編成して来られた。この小濱隊長が敵に接すると、「鎮台兵を斬るのは刀の汚れじゃ」と、逃ぐる鎮台兵を後ろから引き倒して踏みつぶし、また、土手などはい上がらんとする者の足を捉えて引き摺り下ろし、「それ、誰か斬れ」など、まるで子供をあしらうようであつた。そして我々少年に対しては、「オイオイ、深入りするな、後から来るがよろしい」などと情けある言葉をかけたたりして、誠に善いおじさんであつた。

酒宴最中、敵の襲来

行く行く敵を追い払つて進み、大津という所に着いた。ここで平野隊長は八代の本営の方に転じ、後任には奥勇次郎という人が代わられた。

その日はちょうど三月の節句であつたから、平常なら家にて

菓子でも食うものを、と思いながら町の店で羊羹など買って食べた。ここでは分捕りが非常に多く、中にも銭が多くあった様子で、われわれも十五円ずつもらった。また一頭の月毛馬の立派なのが あったが、早速これに驚馬場(あひるばば)の奥勇次郎という新隊長や、平之馬場の伊地知吉彦とかいう小隊長などが乗ってみて 嬉々とはしゃいでいた。

ここには一週間ぐらいも居たであろう。我々の宿所は柿紺屋 (かせぐや)であって美しい娘がいたが、三味線が上手であるという ことであつた。そこである晩、酒宴を催し、その娘に三味線を弾かせて歌う踊るの大騒ぎをやった。

得てこんな時に生憎なもので、「敵軍襲来」という叫び声が聞こえて、驚き跳び出した。

【鹿兒島神社境内の招魂碑】



そこにもたまり兼ねて、さらに久摩山の下の豆原(馬見原)へと退いたのである。

赤松峠の悲劇

(鹿兒島上町の蕎麦切り屋の次男・藤太郎という者、垂水本町の蕎麦切り屋に養子に来ていた。それが十七歳の時であつたそう で、その実見談。)

《戦死者が日に日に増えて兵員が著しく減じたので、補充兵募集が行われた。城下の武士はすでに残っている者が無かつたから町人百姓のうちから大方募集した。元来、町人といえども気概有る者少なからず、特に昨今味方の不利を聞いて憤慨しつつ、大いに敵愾心に燃えていた際であり、且つは腰に大小を差し肩で風を切る武士の颯爽(さつそう)たる姿を羨んでいた時代でもあり、又、こんな時こそ刀をもって人を斬ってみたいような、異常な衝動をも受けていたのであるから、たちどころに一隊の新募兵団が出来たのである。もつとも田舎地方に残っていた武士も若干その中であつたのである。これを二番立ち、又は後立ちと言つた。一同勇躍して出発したが、彼の有名な相撲取りの岩千代なども加わつていた。

頃は青葉繁れる初夏の季節で、暑さ日に日に募りつつあつた。肥後の国は日州境の赤松峠という所にさし掛かつた。この辺の戦さはみな味方の勝利で、行く行く敵を追い払いながら進んだので

あるが、ここに赤松林の中に細谷川があつて、道はその川沿いに上流の方に登り、一町(約109メートル)ばかりして飛び石伝いに向こうへ渡ると、今度は下流の方へ川沿いに下り、数十間に



【神貫神社境内の招魂臺・手前】

して向こうへ曲がつて行くようになっていいる。この谷川の岸に来た時、三人の鎮台兵が逃げて行くのを見た。たちまち味方の一人が抜け駆けして追いつがった。敵は三人とも後を振り振り返り走つていった。

飛び石の渡りを越えて数十間のところで追いついた。逃げる者は大抵後を見い見い走るものである。そして腕に覚えのある者なら、追う者が味方を離れて一人になった時、立ち返つて来てそれを討ち取るものである。今のこれはちょうどその型にはまった訳である。余りの二人は止まらずに逃げて行つたので、ここに一騎打ちの形となつたのである。鎮台兵の方は銃剣を構えている。こちらは太刀を上段に振りかぶつていいる。川を隔てて此方から一同立ち止まつて見ていると、あたかも芝居の花道で大立ち回りが演ぜらるるところのようである。双方立ち向かつて構えたまま、すきを狙い気合いを計つていいるのか、一分、二分、三分、四分、微動だもせぬので、「早く斬らんか」と此方から大声で催促する。それでも動く気配が見えぬ。すると突然、一発の銃声が此方の耳元に響いて、向こうの鎮台兵がパタッと打ち倒れた。振り返つてみると、味方の一人が銃口にまだ白煙の消え残るのを提げて行き、直ちに死骸を探つて財布を曳き出した。実に敏捷な動作で一同驚嘆した。財布には二円ばかりあつたそうである。一同も漸(ようや)くそこに寄つて来たが、彼の一方の味方の男は振り上げた刀を杖につき、呆然と自失したように突つ立っている。これはちよつとおかしいぞ、と不思議に思つて聞くと何も答えずに涙をはらはらと落とした。いよいよ怪しい、と思つて重ねて尋ねると、「この者は私の弟である」と言つて声を出して泣いた。一同いたく胸を打たれて涙を流した。

その後、程なくして、彼の銃で撃つた男が戦死したが、皆々「いい気味だ、盗賊め」と言つた。》

(以下次号)

たるみず春秋

くもり拭く玻璃戸の空や春隣

寺山紀子

部屋の水蒸気がガラス窓を曇らせる。部屋には昔ながらの石油ストーブが燃え、ヤカンはシュンシュンと沸いている。ガラス窓を拭いてみると晴れた青空が現れた。見上げる空は、冬の青空とは違つた明らかに春の空の青だ。もうすぐ春がそこに來ている。

(季語・春隣・冬)

(文章・瀬角龍平)